

真実証

——如来回向の利益としての「真宗」——

龍 弘 信

はじめに

謹按^テ淨土真宗^ニ有^リ二種^ノ回向^一 一者^ニ往相^一 二者^ニ還相^一
就^テ往相^ノ回向^ニ有^リ真実^ノ教行信証^一

(定本親鸞聖人全集一―九頁)

この『顕浄土真実教行証文類』(以下『教行信証』と略す)冒頭の文は、古来親鸞の中心課題として、「真宗大綱」と呼び慣らわされてきた。この「真宗大綱」の名は、親鸞の開顯した仏道、すなわち浄土真宗が、往還二種回向をその大綱、根本的な教学体系とする仏道であることを示している。しかし、今日に至っても、その二種回向、特に還相の回向に関しての決定的な了解が提示されていない。還相

回向をめぐる了解の百出しているのが現状である。このこととは取りも直さず、親鸞の仏道が未だ完全に明らかにされてはいないことのひとつの証左であると言える。私は、二種回向の考察を通して、親鸞の開顯した仏道の姿を明らかにしていきたいと考えるのであるが、その前にまず、諸先学の語る二種回向了解をいくつか尋ねてみたい。

往還二相は衆生に約して名を得るなり。回向の言は弥陀に約して、衆生が娑婆より浄土に往生する往相も、浄土から立ち還りて、衆生を済度する還相も、皆な弥陀の他力回向なり。それを二種の回向と云う。

(香月院深励『教行信証講義』)

『教行信証講義集成』一―二四四頁)

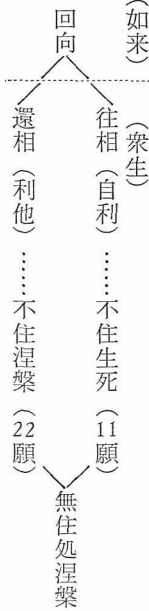
聖人の義に従えば、二種回向のうち、往は往生浄土で、還は還来穢国度人天である。相は相状の義ですがたということである。往相、還相というは衆生に属し、回向は弥陀如来の方に属する。浄土に往生し、穢国に還来して人天を度する力用を弥陀如来より我等衆生に回轉趣向して下されたが二種回向である。

(山辺智学・赤沼智善『教行信証講義』九一頁)

正定聚位の菩薩は一生補処にあるものとして、往相位においては正定聚であるが、それはまた還相の出発点でもあるのである。法性生身として機に応じて一切衆生を教化するのである。一生補処とは現生においては往相の到達点であり、また還相の出発点でもあるのである。

(星野元豊『教行信証』一〇一頁)

これらの了解は、いずれも往還二回向を、如来の本願力回向によって衆生に成り立つ往還二種の相、往生浄土と還来穢国を表わす主題として了解している。このような了解を図示すれば、



となる。この了解の図式によれば、還相回向とは往相の証大涅槃の究竟であり、十一願成就の真実の証果における利他の側面が、二十二願の還相に象徴されるというのである。ここでは、無住処涅槃の不住生死、自利の側面を往相に満足し、不住涅槃、利他の側面を還相に満足して、自利利他円満の大乗菩薩道、もしくは大般涅槃道としての浄土真宗が、本願力を行信する衆生の上に成就すると了解されている。衆生の還相を現生とするにせよ、来生とするにせよ、了解の根底にこの図式があることは共通である。

しかし、この図式の示す了解で、親鸞が二種回向、殊に還相回向によって語ろうとする主題が本当に言い当てられているのだろうか。「還相回向」の語に託した親鸞の教学的主題は、果たして「(如来) 回向による (衆生の) 還相」、あるいは「(衆生を) 還相せしめる (如来) 回向」の主張にあるのだろうか。このような了解の成立した根拠としては、親鸞自身の、

浄土の慈悲というのは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

『歎異抄』定本Ⅳ一八頁

悪をこのむひとにもちかづきなんどすることは、浄土にまいりてのち衆生利益にかえりてこそ、さよふの罪

人にもしたしみ、ちかづくことは候え。それもわがはからいにはあらず、弥陀のちかひによりて御たすけにてこそ、おもうさまのふるまいもそうらわんずれ。當時はこの身どものようにては、いかが候うべかるらんとおぼえ候。

〔末灯鈔〕／定本Ⅱ—一九二〇頁

等の、衆生の往還に託した、現生の教化に対するネガティブな発言が予想される。しかし、これらの言葉の背景には、教化活動（「慈悲」の實踐）において慎重さの要求される当時の教団状況があり、その発言の主題も、二種回向という教学体系に託してはいるが、「慈悲」「供養」「造悪無礙の者への対応」等であり、二種回向の定義、解説を直接の主題、目的としてはいない。また、その発言が「いなかのひとびと」を対告衆とした直接的な布教伝道の場合においてであることなどを考えると、これらの発言の示す二種回向観と、知識階級を対告衆に予測した親鸞独自の思想書である『教行信証』の二種回向観、およびそれが解明しようとする主題とが、同一だと果たして言えるのだろうか。

何より私は、前記の図式からすれば違和感を覚えざるを得ない、親鸞自身の記述をいくつか目にするのである。

弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ

〔高僧和讃〕／定本Ⅱ—九三頁
如來二種の回向を ふかく信ずる人はみなり
等正覚にいたるゆへ 憶念の心はたえぬなり

〔正像末和讃〕／定本Ⅱ—一七〇頁

等がそれであるが、このような、如來の二種回向による獲信、二種回向を深信する、あるいは二種回向に値遇するといった表現の中で、私は特に『浄土三経往生文類（広本）』の記述に注意したい。

大經往生というは、如來選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくりに住して、かならず眞実報土にいたる。これは阿弥陀如來の往相回向の眞因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大經』の宗致とす。このゆえに大經往生ともうす。また難思議往生ともうす。

（中略）

如來の二種の回向によりて、眞実の信業をうる人は、かならず正定聚のくりに住するがゆえに、他力ともうすなり。しかれば、『無量寿経優婆提舍願生偈』に曰わく、「云何回向 不捨一切苦惱衆生、心常作願 回向為首得成就大悲心」故。これは『大無

量寿経」の宗致としたまえり。これを難思議往生とも
うすなり。
(定本Ⅲ一二二〜八頁)

この記述には、大経往生、すなわち、「証卷」の主題で
ある難思議往生が、必至滅度の願の成就としての住正定聚
にあると説かれており、その住正定聚は、如来の二種回向
によって真実の信樂を獲得した人に成就する、と示されて
いる。

今回私は、これらの表現(如来の二種回向との値遇によ
る獲信)を念頭に置きつつ、「証卷」を題材に、『教行信証』
における親鸞の二種回向觀を尋ねてみたい。そして「証卷」
もしくは『教行信証』の全体における還相回向積の役割、
言い換えれば、還相回向積が『教行信証』の「証卷」後半
部分に位置することの意味をも、併せて考察していきたい。

一 浄土の真実証

イ 難思議往生の仏道

『教行信証』の「証卷」は、その題号「願浄土真実証文
類」が示すように、浄土の真実証の開頭を主題とし、「願
浄土真実信文類序」に語られる、自性唯心、定散自心に簡
んだ金剛の眞信を明かす「信卷」の課題を、信に成就する
証という観点から継承したものである。

この浄土の真実証の開頭はイコール、

必至滅度之願 難思議往生 (定本Ⅰ一四四頁)

の開頭にあると、親鸞自らが標挙している。この標挙の文
からすでにいくつかの問題が考えられる。まず、必至滅度
の願

必至滅度願文 『大経』言、設我得_レ仏_一 國中_レ人天
不下_レ住_レ定聚_一 必至_レ滅度_上者 不_レ取_レ正_レ覺_一 已上
(定本Ⅰ一四六頁)

と難思議往生との関係であり、願真実証の課題が「必至滅
度之願 難思議往生」の開頭によって成り立つということ
の意味である。そしてまた、「必至滅度之願 難思議往生」
を標挙として持つ「証卷」に、「真実証」積と並んで「還
相回向」積が存在する理由も併せて考えられねばならない。
必至滅度の願成就とは、

願成就文 『経』言、其有_レ衆生_一 生_レ彼国_一者、皆悉
住_レ於_レ正定之聚_一 所以者何、彼仏国中、無_レ諸邪聚
及不定聚_一 (定本Ⅰ一四六頁)

であり、親鸞は、この「生彼国者」を「かのくにうまれ
んとするもの」(『一念多念文意』)と読んで、住正定聚が現
生に、しかも「(如来が)彼の(浄土の)因を建立せること
を了知する」(『如来会』)獲信の時、即時に成り立つと述べ

たのである。親鸞は本願成就文の「即得往生」を、この住正定聚で押さえている。

すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚なるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時入必定とももうすなり。

『一念多念文意』定本Ⅲ—二九〇—三〇頁

このことから、親鸞の語る即得往生、難思議往生とは、命終の後に他界的浄土に生まれることを指すのではなく、獲信の即時に成就する仏道、正定聚の機に成就する人生の内的意味、浄土の功德を自証行証する人生を示す言葉であることが知られる。往生とは、流転輪廻に譬えられる生の無方向性に対して、はからずも獲得された「超絶去」という方向性を、その往の語に表現している生であるとも言える。そして、その生において自証される浄土の功德を表わすものが、「証卷」に引かれる『論註』下巻の五種の功德である。

親鸞は、浄土の不可思議力の成就を語る下巻の二十九種莊嚴の内、妙声、主、眷族、大義門、そして、功德の総相

である清浄の五種の功德を引いた。

妙声功德においては、

『経』言 若人但聞彼国土清浄安楽 剋念願

生亦得 往生即入正定聚 此是国土名字為二仏

事一 (傍点筆者・定本Ⅰ—一九七頁)

として、国土の名字(名号)を聞くことにおいて、現生に正定聚に入る―従来は「生まれんと願えば亦往生を得て、すなわち正定聚に入る。」と読み、浄土に往生した時に正定聚に入る、の意―ことを明かし、主功德においては、

若人一生安楽浄土 後時意願下生三界教化衆

生上捨浄土命随願得生 雖三生三界雜生火中無

上菩提種子畢竟不三朽 何以故 以三逐正覚阿弥

陀善住持一故 (傍点筆者・定本Ⅰ—一九七—八頁)

として、その正定聚の機においては阿弥陀如来の善住持力によつて、三界雜生の火中にありながら、「衆生を教化せんと願う」願生の仏道に不退転であること、「無上菩提の種子、畢竟して朽ち」ざることが成り立つ、と述べている。①

そしてその仏道の具体的内容が、

彼安楽国土 莫非三 是阿弥陀如来正覚浄華之所ニ化

生一 同一念仏無三別道故 遠通 夫四海之内皆為レ

兄弟一也 眷族無量 (定本Ⅰ—一九八頁)

という、雑業を以ての故に「眷族若干 苦樂万品」のこの娑婆世界に、眷族、共に安樂浄土に往生せんと願う同一念仏の眷族を求め、生み出していこうとする、眷族功德の自証行証である。そしてその仏道において初めて、

願ニ往生者、本則三々之品、今無二二之殊、亦如三溜瀼、一味一 (定本一―一九八頁)

という、大義門功德の語る、人間の、個別の価値観によってではない平等、真の意味での平等を見出し、願うことが成り立つのである。この平等の問題は、「証卷」の『大經』『安樂集』の引文に、浄土の人民は容姿が等しく端正で差別がなく、かつての国での名に従って仮に人天と呼ばれているに過ぎない、という表現で取り上げられている。

この眷族功德の自証行証とは、言わば「如来のヒューマニズム」(神戸和鷹)の発見と、その広開伝達である。「如来のヒューマニズム」とは、人間の立場、人間関心に立つたヒューマニズムではなく、人間を如来に矜哀大悲される「一切苦惱の群生海」として見る人間観である。一人の例外もなく「無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繋縛せられ」、「本願力を信樂するをむねとす」る他、出離の道無き存在として人間を見る、同苦同感、懺悔の眼。あらゆる主義主張、イデオロギー、価値観に表現される人間関

心を越えた、いわば大悲の人間観(感)である。そのような人間観、換言すれば如来の本願を公開するところに、各自別の主張によって同胞と連帯を求めつつ孤立していく人間業に簡んだ、浄土の功德の行証としての教人信が成就するのである。

そして、以上のような内実を持つ往生浄土の仏道が、
有ニ凡人煩惱成就、亦得ニ生ニ彼浄土、三界繫業畢竟不三牽、則是不三断ニ煩惱、得ニ涅槃分一 (定本一―一九九頁)

という、凡夫が煩惱を断ぜずして無上涅槃にいたる、現生の無上仏道としての意義を持つことを、清浄功德の文が示している。

ロ 親鸞の「涅槃」観

このように難思議往生とは、必至滅度の願の成就として衆生に成就する仏道であり、その開頭が、標拳の文の示す「証卷」の根本課題なのであるが、では何故、顕真實証が「必至滅度の願 難思議往生」の開頭によって成り立つのであるのか。顕真實証が難思議往生の仏道の開頭によって成り立つということ自体、この巻における親鸞の顕真實証の関心は、証の意味の解説、所謂定義付けにあるのではないことが知られる。聖道門においてなされるような証の解説、

積尊の自内証であり、仏教の究極的理想、仏道の最終目的を示す真実証、涅槃、真如、一如等の語の内容を吟味検討して定義づけるといった、所謂ドグマ的関心は親鸞にはない。謹顕^{チヤク}真実証^{マコト}者^ハ、則是利他円満之妙位・無上涅槃之極果也、

という一応の押さえと、

必至^ニ滅度^ニ即是常樂^{ナリ} 常樂即是畢^ハ 竟寂滅^{ナリ} 寂滅即是無上涅槃^{ナリ} 無上涅槃即是無為法身^{ナリ} 無為法身即是実相^{ナリ} 実相即是法性^{ナリ} 法性即是真如^{ナリ} 真如即是一如^{ナリ}

(以上、定本Ⅰ—一九五頁)

といった転釈こそあるが、

大涅槃ともうすに、その名無量なり。くわしくもうすにあたわず。おろおろ、その名をあらわすべし。

(『唯信鈔文意』／定本Ⅲ—一七〇頁)

というように、親鸞自身、それにドグマ的な解釈を加えることを敢えて避けたのではなからうか。

聖道門の仏教学と一線を画す親鸞の教学姿勢がここに見られる。その一例を挙げれば、親鸞は前述のように、「証卷」において『論註』の浄土の功德を述べ、「証卷」に続く「真仏土卷」には『涅槃經』を引いて涅槃・仏性の問題を展開するのであるが、「証とは何か」「仏土とは何か、ど

のような境界か」といったドグマ的な問いからすれば、むしろ逆に、「証卷」に涅槃・仏性が、「真仏土卷」に浄土の功德が引かれるのが妥当ではなからうか。そうではないところに、親鸞のドグマ的発想への拒絶が、私には感じられる。たとえ体裁上は三法乃至四法を明かすという聖道門以来の方法を取っていても、親鸞における学の姿勢は聖道門とは全く異質であり、そこに明らかにされる四法の概念そのものが既に異なっている。教行信証から教行信証への次第の転回は既に多くの先学の指摘するところであるが、行が行修から現行へ、信が信解から覚知へ、そして「証卷」に関して言えば、そこに問われる涅槃観自体が異なっている。

親鸞において開顕される証とは、三大阿僧祇劫の行修の果てに期待される証果ではなく、本願の名号として衆生の行信の中に現行し、真如一実の功德としてその身に満足される、功德として働く無上涅槃であり、本願の行信に成就する無上仏道としての証道である。親鸞は証を、積尊に託して想定された理想的境地としての未来の行果(結果)ではなく、現在に成就する証道(過程、プロセス)として、また普遍的ではあるが固定的な真理(体)としてではなく、今現に衆生に働き証道を歩ましめる功德、真実なるものの

力動性(用)として語っているのである。衆生はその力動の体験において、その背景、根拠としての真如一実、無上涅槃を覚知し得る。

親鸞にとつては、証果としての境涯よりもむしろ、真如一実なるものの力用と、それによって衆生に成立する仏道の内容とを開顕することに「証卷」の主眼があったと言えよう。仏教の知見によれば、体即用、一如とは固定的な本体として何処かにあるものではなく、力用として衆生に作用するその根拠としてあるものであり、それを示すのが、

然者、弥陀如来、從_ニ如_一來_ニ生_ニ現_ニ報_ニ化_ニ種_ニ々_一身_一也、

(定本I—一九五頁)

の文なのではなからうか。

私はこの文を、信心獲得の根源としての無上涅槃、一実真如の力用、功能を示す文であると考ええる。ここに表わされる「報化種々身」とは、親鸞をして往相回向の信樂を獲得せしめた真如の力用の具体相であり、言い換えれば、親鸞の信樂の体験に見出だされた、獲信の契機の宗教的意味である。報身の弥陀とは、畢竟、信心の体として衆生に現行する本願の名号であり、種々の化化身とは、信心獲得の縁となった「よきひとのおおせ」、釈尊、法然に代表される善知識とその教説である。

そして、その報身化化身との邂逅に成就する仏道こそが、然煩悩成就凡夫 生死罪濁 群萌 獲_ニ往相回向_ニ心行_一 即時入_ニ大乘正定聚_ニ之數_一 住_ニ正定聚_ニ故必至_ニ滅度_一 (定本I—一九五頁)

と語られる必至滅度、根源的真理への回帰の意味を人生にもたらす「難思議往生」の仏道であり、「証卷」冒頭に掲げられた標榜の文は実に、このような仏道、証道を開顕しようとする「証卷」の課題を、象徴していると考えられるのである。

二 還相回向の利益

「証卷」の課題である必至滅度、必可超証大涅槃の仏道の開顕は、

夫案_ニ真宗_ニ教行信証_ニ者_一 如来大悲回向之利益 故若因 若果無_ニ有_ニ一 事 非_ニ阿弥陀如来清淨願心之所_ニ回向成 就_一 因淨 故果亦淨也 應_ニ知_一

(定本I—二〇二頁)

という真実証の結紮で一応完結する。この結紮はまた、
禮案_ニ淨土真宗_ニ有_ニ三種回向_一 一者往相 二者還相 就_ニ往相回向_ニ有_ニ真実_ニ教行信証_一 (定本I—一九頁)
という「教卷」真宗大綱の文と対応する、往相回向の結紮

でもある。眞実教を依止とし、諸仏稱讚の名号を聞いた信心を因として、衆生に展開する願生の仏道が、往相回向の眞実証、難思議往生として凝集的に表現されているのが「証卷」であり、少なくとも前半の眞実証の部分はその課題に正面から取り組んでいる。では、その後半部分である還相回向積は一体何を表現しようとしているのであろうか。

先学の二種回向観は本論の冒頭にいくつか列挙したが、それによれば、還相回向は衆生の還相であり、仏道としての浄土眞宗の開頭はここでようやくその半分が終わったに過ぎない。しかし私は、この眞実証の結核は、眞宗の一側面としての往相回向の教・行・信・証を総結する箇所ではなく、眞実の教・行・信・証を内容として成立展開している往相回向の仏道こそが「眞宗」であり、浄土眞宗たる往相回向の仏道を総結し、その根拠である如来の大悲回向の利益を解明する還相回向積への展開を語る箇所であると考へる。還相回向積とは、往相回向の眞実証の後に衆生に獲得される利他教化地の利益を語るものではなく、往相の仏道を成立せしめる「如来の大悲回向」、法蔵菩薩自身の利他教化、回向利益他を解明の主題とした箇所であろう。前述の「然者弥陀如来従如来生」の文に即して言えば、報身

と応化身の示現の問題を解明、論述する箇所であると言えよう。この「従如来生」の文が涅槃の列名転積の後に位置し、弥陀如来の語を冠せられていることも、「眞実証」から「還相回向」へ、という「証卷」の構造と対応しているように思われる。

イ 純粹未来としての浄土の菩薩

前述のような観点から還相回向積の本文を尋ねてみると、眞実証の課題が「衆生がかの国に生まれる」ことであるのに対して、還相回向積の課題は「衆生をして生まれしめたまう」ことにあると言える。しかし、親鸞は、そこに語られる還相回向の主体、穢国に遷来する利他教化地の菩薩が何を意味するのか、全く指示していない。還相回向積の文自体、

二言ニ還相回向者 則是利他教化地益也
(定本一—二〇一頁)

とあるのみである。それ故、引文から推察する他ないのであるが、還相回向積はまず、『浄土論』「利行満足章」の「出第五門」の文と、『論註』下巻「起観生信章」回向門の還相の文を引く。これらは、いわば還相回向の総標の文であるが、その菩薩が何を示すかはいまだ不明である。

それに続いて親鸞は、『論註』下巻「観行体相章」の不

虚作住持功德の文から、「利行満足章」の出第五門までを引く。この文は「又言」として引かれており、親鸞の経・論・釈の引用の定則からすれば、经文として意識されていると思われる。そして、

願ニ『註論』一 故不三出願文ニ 可三披ニ『論註』一

(定本一―二〇一頁)

という文から見て、親鸞はこの『論註』の文を、二十二願の願文、それもおそらく願成就の文として捉えていたのではなからうか。

このような、『論註』の文に託した親鸞の還相回向の解明は、まず、不虚作住持功德の文から始まっている。

即見ニ彼仏一 未証淨心菩薩 畢竟得三証平等法身一
与ニ淨心菩薩一 与ニ上地諸菩薩一 畢竟同得寂滅平等一故
(定本一―二〇二頁)

この文をこの位置に引く親鸞の意図は何であらうか。ここで言う、「未証淨心の菩薩」あるいは「平等法身」「淨心の菩薩」「上地の諸の菩薩」とは何を意味し、また「畢竟じて平等法身を得証する」「畢竟じて同じく寂滅平等を得る」とは何を意味するのであろうか。これに続く、

平等法身者 八地已上法性生身菩薩也、寂滅平等之法也、(中略)此菩薩得三報生三昧一 以三三昧神力一 能一

処一念一時遍二十方世界一 種々供養一切諸仏及諸菩薩大会衆海一 能於下無量世界 無二 仏法僧一 処上 種々示現種々教化度三脱一切衆生一 常作三仏事一 初無二 往來 想ニ 供養 想度脱 想一 是故此身名為ニ平等法身一 此法名為ニ寂滅平等法一

未証淨心菩薩者 初地已上七地以還諸菩薩也、此菩薩亦能現三身一 若百若干若万若億若百千万億無仏国土施ニ 作仏事一 要 作ニ 心一入ニ三昧一 乃能非三不ニ 作心一 以ニ作心一故 名為ニ未証淨心一

此菩薩 願下生ニ安樂淨土一即見中阿弥陀仏上 見ニ阿弥陀仏一時 与ニ上地諸菩薩一 畢竟身等 法等 龍樹菩薩婆藪槃頭菩薩輩 願三生ニ彼三者當ニ為ニ此二耳
(定本筆者・定本一―二〇二―三頁)

という解説からすれば、未証淨心の菩薩とは、作心有功の利他教化を作す初地已上七地以還の菩薩であり、平等法身とは、任運無功用の利他教化を作す八地已上の法性生身の菩薩である。

報生三昧の中、無量の有仏無仏の国土において常に仏事を作しつづつ、往來、供養、度脱の想いなき平等法身の菩薩に対して、無仏の国で仏事を施作しながら、要らず心を作

して三昧に入らねばならない未証淨心の菩薩。兩者の間に容易に同一と呼ぶことを許さない異質性、絶対の断絶性がある。それを語るのが、

問曰 案^{スルニ}「十地経」一 菩薩進趣^{カク}階^{キョウヤウヤク}級^{キョウヤウヤク}漸^リ有^リ下^リ無量^ノ功^ク勲^{クン}遂^フ三^ニ多^ク劫^ノ數^ヲ一 然^{シカウシテ}後^ニ乃^チ得^ル此^ニ一 云^フ何^レ見^ル阿^彌陀^仏一 時 畢竟^ニ与^リ三^ニ上^ニ地^ノ諸^ノ菩薩^一 身^ヲ等^シ法^等邪^ニ

答曰 畢竟^ハ、未^ダ三^ニ失^ル此^ニ等^一

故言^ニ等^ニ耳^一 (傍点筆者・定本I—二〇三頁)

という問答である。

この兩者の間の断絶性を物語るのが、未証淨心の菩薩の「作心」である。この「作心」とは、「造作分別の心」「作意分別」、すなわち分別に立った教化意欲、あるいは教化の課題に立った努力意識であり、未証淨心の菩薩はこの意欲によって、初めて自利利他円満の菩薩たり得ると言える。しかし、このような意欲は、それが自他の分別に立つが故に、「かならず心を作」さない限り、その意欲を奮い立たせない限り、仏事を作すことは不可能である。そしてまた、その作心の故に、「常に仏事を作す」ことが不可能なのである。そしてこのような努力意識の中に既に、菩薩道における退転、自己閉塞の要因が予見されるのである。

その菩薩道における退転、自己閉塞が、
菩薩^{シテ}於^テ七^ノ地^ノ中^ニ得^ル二^ノ大^ノ寂^ノ滅^一 上^ニ不^レ見^ル三^ノ諸^ノ仏^ノ可^レ二^ノ求^ル一
下^ニ不^レ見^ル三^ノ衆^ノ生^ノ可^レ二^ノ度^ル一 欲^ス下^ニ捨^テ仏^ノ道^ニ証^ス 於^テ實^際上^ニ 爾^レ
時^ニ若^シ不^レ三^ニ得^ル十^ノ方^ノ諸^ノ仏^ノ神^ノ力^ヲ加^フ勸^ム 一 即^チ便^チ滅^ス度^ヲ与^リ三^ニ乘^一
無^ニ異^一 (定本I—二〇四頁)

と語られる、七地沈空の難である。

この菩薩修道における退転を示す七地沈空の難は、度断知証の四弘誓願に代表される菩薩の自利利他の課題が、その課題の、殊に衆生利益の実践課題の、困難さ、果てしなさに頓挫して、自利のみを求めると二乗の境涯に頹落してしまふことを意味する。言わば修道の過程のニヒリズム、悪取空であって、「實際」と説かれる個人的安逸、観念的悟りの中へ逃避した、菩薩利他行の放棄を指す。そしてそのような頹落は、作心と語られる菩薩の教化意欲が、自他分別、自他相對の差別の意識上に成り立つ意欲でありつつ、その差別、他を意識することによって初めて自分が成り立つという、自我意識の構造を超越し得ていないが故に必然的に陥る、いわば疲労困憊である。未証淨心の菩薩は、沈空の難を必然する要因を、その菩薩の成立基盤である作心の中に、既に内包していると言えよう。

にもかかわらず、『論註』は、

若往^{シテ}生^ム安樂^ニ一見^ニ阿^ラ彌^ト陀^ニ仏^ト一 即^チ無^ク此^ノ難^ヲ一 是^レ故^ニ須^ク三
言^フ畢^シ竟^ス平^ニ等^ニ一 (定本Ⅰ—二〇四頁)

として、得生見仏の利益によって、この菩薩が沈空の難を越えて、自然に増進して仏と等しくなると説くのである。

この菩薩の見仏とは何を指し、それ故七地の難を逸れるとは、一体何を意味するのだろうか。

この浄土の不虚作住持功德を示す「即見彼仏」の文は、『浄土論』解義分において、

何者莊嚴不虛作住持功德成就 偈言^三「觀^ニ仏^ノ本^ノ願^ノ力^ヲ」遇
無空過者 能令速満足 功德大宝海^二故 即見^ニ彼^レ、
仏^一未^レ証^ニ淨^ノ心^ノ菩^{サツ}薩^ヲ畢^シ竟^ス得^レ証^ニ一 平等法身^一 与^ニ淨^ノ心^ノ菩
薩^一 与^ニ上^ニ地^ノ諸^ノ菩^{サツ}薩^一 畢^シ竟^ス同^ニ得^ニ寂^ノ滅^ノ平^ニ等^ニ一故

(真宗聖教全書Ⅰ—二七四頁)

として、「観仏本願力」の故に得る功德の内容として説かれていゝ。それを先学は、「観仏本願力」が此土の信心であるのに対し、「即見彼仏」は彼土の利益である、と了解している。現生の獲信の利益として、来生の浄土に未証淨心の菩薩として生まれて阿弥陀仏を見、自然に七地の難を越えて八地の不退に至る、という了解である。

しかしながら、この不虚作住持功德、「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」の成就を、彼土の利

益ではなく、敢えて現生の凡愚の信心の利益として了解したのが親鸞である。

よく本願力を信樂する人はすみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむるなり。

(傍点筆者・『尊号真像銘文』定本Ⅲ—八九頁)

このような親鸞の意図からすれば、観仏と見仏を現生と来生に分けるべきではなく、また、前章で考察した親鸞の難思議往生観から見ても、観仏本願力の凡愚、信心の衆生に見仏の未証淨心の菩薩の義が備わる、と見るべきではなからうか。

このように考えると、未証淨心の菩薩の作心の問題は、信心の行者における自信教人信、教化意欲の問題であることが知られる。

回心に始まる自信教人信は、大悲本願の伝達、言い換えれば、「如来のヒューマニズム」の伝達であるが、そのような教化意欲も、人間の営為であるかぎり、退転、挫折の危機に見舞われることは不可避である。未証淨心の菩薩の作心に象徴される前述のような問題性を、その教人信の意欲に含んでいるが故に、疲労感、徒労感に陥るのも無理からぬことである。しかし、そのような危機において問題となるのは、「如来の仕事を盗む」^③(清沢満之)と表現される

べき、宿業の身の現実を忘れた教化者意識、自己の能力、
嘗為への執著と、意の如くならぬ他者への責任転嫁の意識
である。そのような危機を契機として聞思、内観に立ち帰
り、「煩惱具足の身」の事実に戻着、落在する。そのよう
な自信↓教人信↓修善↓自信の「連鎖的循環事」が、実に
本願力との値遇に開始されるのである。

前に引いた未証淨心の菩薩の解説の文において、この菩
薩は「無仏の国土に仏事を施作す」と語られている。未証
淨心の菩薩とは、言わば無仏世の衆生、仏に値遇し得ない
衆生の、自力修道の有り様の象徴であり、「即見彼仏」の
文において親鸞は、その自力の衆生に成就する願生淨土の
仏道を、仏道における教人信の動転の問題に託して語って
いると思われる。それ故に「若往生安樂見阿弥陀仏 即無
此難」と言えるのであろう。

そして、得生見仏の未証淨心の菩薩が畢竟して得証する
報生三昧、常作仏事の平等法身の菩薩が、

觀ニ察菩薩莊嚴成就一者 觀ニ彼菩薩一 有ニ四種ノ正修行
功德成就一 一 應ニ知一 真如是諸法正体 体如而行
則是不行 不行而行 名ニ如実修行一 体唯一如而
義 分為ニ四一 是故四行以ニ正統之ニ 何者 為ニ

四一者 於ニ一仏土ニ身不ニ動 揺ニ而遍ニ十方一 種
々応化 如ニ実ニ修行 常作ニ仏事一 偈言下 安樂國清
淨 常転ニ無垢輪一 化仏菩薩日 如ニ須弥住持一故上
開ニ諸衆生 淤 泥華一故 八地已上 菩薩 常在ニ三
昧一以ニ三昧力一 身不ニ動ニ本処ニ而 能 遍 至ニ十方一
供ニ養 諸仏一教化ニ衆生一(傍点筆者 定本一〇七頁)
という、四種の功德をもって語られる淨土の菩薩であり、
かつまた、

『浄土論』曰 出第五門者以ニ大慈悲ニ 觀ニ察 一切苦
惱衆生一 示ニ応化身一 回ニ入 生死 園 煩惱林 中一
遊戯 神通一 至ニ教化地一 以ニ本願力 回向一故 是名白
出第五門一 已上

『論註』曰 還相者 生ニ彼土ニ已テ 得ニ奢摩他 毘婆舍
那 方便力成就一 回ニ入 生死 稠林一 教化ニ 一切衆
生一 共向ニ 仏道一 若往若還 皆為ニ 技ニ衆生ニ渡
生死海ニ 是故言下 回向為ニ首一得ニ成ニ就 大悲心一
故上 (定本一〇一～一〇二頁)

と語られる還相の菩薩である。これを第二十二願、
復次『無量寿経』中阿弥陀如来本願言 設我得ニ仏一
他方仏土諸菩薩衆 来ニ生 我國一 究竟 必至ニ一 生

補^ホ処^ニ一^ニ除^ク下^ニ其^ノ本^願自^在所^化為^ニ衆^生故^ニ 被^テ弘^誓繼^一
 積^ミ累^シ徳^本一^ニ度^ニ脱^シ一切^一遊^シ諸^仏國^一修^シ苦^薩行^一
 供^ニ養^十方^諸仏^如來^一開^ニ化^シ恒^沙無^量衆^生一^ニ使^中
 立^セ無^上正^眞之^道超^ニ出^常倫^一諸^地之^行現^前修^ニ
 習^テ普^賢之^徳一^ニ若^シ不^ニ爾^二者^一不^ニ取^正覺^一
 習^テ普^賢之^徳一^ニ若^シ不^ニ爾^二者^一不^ニ取^正覺^一

(傍点筆者・定本一〇四〜五頁)

に還源すると、他方仏土の諸菩薩衆とはすなわち未証淨心の菩薩であり、それが淨土に生まれて阿弥陀仏を見、究竟して至る一生補処の菩薩が、八地已上、平等法身の菩薩である。その一生補処の菩薩が、親鸞の読み替えによれば、除かれる還相回向の菩薩、任運無功用に遊諸仏國、供養諸仏、開化衆生する淨土の菩薩である。

ここで願文の「究竟」、問答の「畢竟」をどう理解するかが、親鸞の還相回向觀を理解する上での鍵となると思われる。私はこの語を、諸講録の説くような、実体的時間における将来ではなく、信仰的時間における未来、曾我量深の語る純粹未来として了解する。

任運無功用の度脱教化を作す八地已上、平等法身の淨土の菩薩と、七地已下の作心有功用の菩薩と示される凡夫との間には、絶対の断絶、隔絶が存在することは前に述べた。

にもかかわらず、見仏、本願の信において「畢竟平等」「究竟必至」と説かれるのは、信心の行者においては、任運無功用の還相教化が永遠の理想、永遠の志願として仰がれるものであり、また同時に、前述の「連鎖的循環事」を内容とする不退転の仏道が、八地の不退を待つことなく、初地不退、見道初歡喜地に暨えられる獲信において成就する以上、必ず至るべき未来、究竟必至、畢竟得証する純粹未来として確信されるのだ、と私は考えるのである。^⑥

ロ 「よきひと」としての淨土の菩薩

このように難思議往生とは、必ず滅度に至る、必ず補処に至る、必ず還來穢國する、と言ひ得る確かな仏道、無上仏道であることが知られる。この淨土の還相の菩薩とは、安易に往相の行者の側面と言うことも、実体的な來生の利益ということも許されない、永遠の未来でありつつ、当に來たるべき境涯として、現在の信に仰がれていることが知られたのである。私はこの「畢竟得証平等法身」とは、未来に度衆生の課題を先送りするような意味では決してなく、難思議往生、現生の往相の一道における仏道としての確かさ、必ず平等法身を得証すべき確かな仏道を示す文であると考えられる。

しかし、還相回向の主題が、「畢竟」「究竟」という言

葉が示す、往相の行者と還相の菩薩との関係の解明のみにあるのならば、還相回向積はこの菩薩莊嚴の引用で終了してよいはずである。にもかかわらず親鸞は、以下、「浄入願心章」から「利行満足章」まで引用する。これらの引文の意図は何であろうか。そしてまた、このような了解は、本論冒頭に列挙した「二種回向との値遇」を語る表現の内容を、必ずしも言い当ててはいない。

ここで改めて考えると、浄土の菩薩莊嚴は、観仏本願力の衆生の究竟する利益であると同時に、衆生の觀察の内容でもある。親鸞における観、浄土の功德の觀察とは、前章の五種功德の考察でも触れたように、信心の内観であり、観想、立相住心といった止観行を意味しない。功德の自証、すなわち、この娑婆世界の具体的事象の中に本願の大悲の現前を感得する体験、大悲の現行という意味を発見する体験に他ならない。言い換えれば、如来発願を必然せしめた娑婆世界の穢土としての問題性、穢土の穢土たる所以と、その発願の大悲性の覚知であり、その大悲の覚知を通して自己自身の上に成就する不可思議の功德を、改めて発見、覚知することである。曇鸞が、

眞実功德相者有^レ二種功德^一 一者從^レ有漏心一生^レ不^レ順^レ法性^一 所謂^レ凡夫人天諸善人天果報^レ若因若果

皆是顛倒 皆是虚偽^{ナリ} 是故^レ不^レ実功德^一 二者從^レ菩薩智慧清浄業一起^レ莊嚴^レ依^レ法性入^レ清浄相^一 是法不^レ顛倒不^レ虚偽^一 名爲^レ眞実功德^一 云何不^レ顛倒^一 依^レ法性順^レ二諦^一故 云何不^レ虚偽^一 攝^レ衆生入^レ畢竟淨^一故 (定本Ⅷ—十二頁)

と語った浄土の「眞実功德相」の教説を、親鸞は、衆生の不実功德への大悲発願を因とした如来の永劫修行の眞実功德が、名号を行信する衆生に成就すると了解したのである。

このような、一心帰命の信における浄土の功德の自証としての觀察において、菩薩莊嚴の觀察とは、自己の眼前に在る善知識、「よきひと」の姿に浄土の菩薩の応化身、その「おおせ」に善巧方便の教化としての意味を見出すことに他ならない。菩薩莊嚴を含んだ浄土の二十九種功德の觀察は、全体が畢竟、観仏本願力、不虚作住持功德の觀察に集約されるのであるが、この観菩薩において初めて、流転の衆生に、行信の利益として、浄土の菩薩を永遠の理想と仰ぐことが成り立つのである。そこに、自信教人信を根本行業とする、浄土の眷族功德の行証としての生、「普共諸衆生往生安楽国」の生が開始されるのである。

「よきひと」との値遇に、観菩薩、無量の世界に応化する浄土の菩薩の願心との感応道交が成り立つが故に、無仏

の世界への願生を究極的な志願として、阿弥陀の浄土へ往生して無仏世への往生に耐え得る菩薩とならんと願う、願生の一途が成就する。その光景を示すものが、「願生偈」の、菩薩莊嚴の前三種に続く、

何等世界無^ニ二^ハ 仏法功德宝^一
我願^レ皆^ハ往生^ス 示^ニ仏法^一如^ク佛^ノ 願^見彌陀^佛
我作^レ論說^レ偈^ヲ 普共^ニ諸衆生^ト 往生安樂國^一

(真聖全一―二七〇頁)

の文である。「安樂國清淨^ニ 常転^ニ無垢輪^一 化仏菩薩^日 如^ニ須弥^{住持} 無垢莊嚴^光 一念^及一時^ニ 普照^ニ諸仏^會 利^ニ益^諸群生^一 雨^ニ天^樂華^枝妙香^等供養^ス 讚^ニ諸仏^{功德} 無^レ有^ニ分別^心」と語られる菩薩の応現に感動するが故に、「何等世界無仏法功德宝 我願皆往生 示仏法如仏」の志願を起こし、それ故に「我作論說偈 願見弥陀仏普共諸衆生 往生安樂國」と願う。そして、その菩薩、「よきひと」を憶念しつつ、浄土を願って、五濁無仏の世であるこの穢土の業を耐えて生きるのである。

親鸞の了解に立てば、偈頌としての「願生偈」は全体、

世親菩薩の「わが信念」の表白であり、この四行八句は、言わば、世親におけるもう一つの作願門、もう一つの回向門であり、願生の仏道が真に無上仏道であることの宣言であるとも言えよう。

おわりに

以上、「証卷」に開顕される仏道の内容について考察してきたが、還相回向の問題を十分に論究することが出来なかつた。還相回向の課題は真宗、浄土真実の教行信証を成立せしめる如来の願心に持つものであり、という私の見解も、詳説し切れないまま紙数が尽きてしまった。

ただ、前節で述べた、観察の内容としての菩薩莊嚴は、その根源を如来の願心に持つものであり、そのことは「観行体相章」に続く「浄入願心章」の、

応知者^ハ 応^下知^下此^三種^莊嚴^{成就} 由^三本^四十八^願等^清 淨^願心^之所^三莊^嚴 因^淨 故^果淨 非^甘無^ニ 因^他因^有也、 (定本一―二一〇頁)

という文に示されている。この文から、浄土の菩薩とは実に、如来自身の還相の志願、利他教化の力用の具体的象徴であることが知られる。私は、この「浄入願心章」以降、「利行満足章」までの引文全体が、信心における観察の内

容としての如来因位の永劫修行、法蔵菩薩の五念門行とその成就について語っているのではないかと考える。この問題を含めた「浄入願心章」以降の考察は次の論述機会を待つこととする。

(未完)

註

① この主功德の文の主題は、仏力住持による衆生の往還、殊に還相の教化を説くことにある、との先学の了解もあるが、私は妙声↓主↓眷族という引文の展開から、前述のように考える。

② 「回向論」(『親鸞教学』第53号六二頁) 参照。

③ 清沢満之全集Ⅷ―四七九頁。

④ 『臘扇記』(同右Ⅶ―三八六―七頁) 参照。

⑤ 「信卷」引用の『安樂集』菩提心の文、「此心長遠 尽ヒトナク未來際ミナト、此心普クハツク備ツク離ユキ二乘障ニ」にも同様の主題が託されていると思われる。

⑥ 弥勒とは、この一生補処、平等法身の菩薩であり、「信卷」真仏弟子釈の「便同弥勒」とは、この、即等に簡んだ「畢竟平等」の意を含んだ「おなじ」であると考えられる。

この論文は、旧稿「真宗仏道の成就」(『親鸞教学』第53号)の続編に当たるもので、併せて御参照頂ければ幸いである。

(第一研究室特別研修員 真宗学)